

連載 この国で生まれ育って「入管法改正」の陰で ①

「檻のない監獄」を生きる中 2 女子「私たちに死んでほしいの…」 仮放免、生活保護もない子どもたち



東京新聞 2023 年 4 月 12 日 配信

「なぜ 2 歳の子の保険証まで取り上げるのですか」 埼玉県内の古いアパート。両親、3 人の妹や弟と暮らすクルド人の中学 2 年生女子、セレンさん(13)＝仮名＝は悲痛な声で語る。2022 年 10 月、2 歳の妹が 39 度の熱を出した。2 日たっても下がらず、両親は病院に連れていくことも考えた。しかし、一家は健康保険証がなく、治療費は全額自己負担。市販薬で幸い回復したが、「今度誰かが病気になったら…」。不安は尽きない。保険証がないのは一家が日本での在留資格がない、違法状態の非正規滞在者のためだ。クルド人はトルコなどの少数民族。父は 10 年に来日し「母国で迫害された」と難民申請した。しかし、出入国在留管理庁(入管庁)から不認定とされ、在留資格がないまま申請を繰り返している。別に難民申請をした残りの家族は当初在留資格を与えられていたが、22 年 8 月に不認定が決まり在留資格を失った。



「仮放免」の暮らしについて話すクルド人の女子中学生＝埼玉県内

クルド人 独自の言語と文化をもつ民族で推定人口は約 3000 万人。「国を持たない最大の民族」と呼ばれ、トルコ、イラク、シリアなどにまたがって居住。トルコでは弾圧が激しく多くの人々が難民として逃れており、国連(推計)によると 2011 年から 9 年で世界各国で約 5 万人のクルド人が難民認定された。日本でも埼玉県蕨市や川口市に約 2000 人が住んでいるが、国内では難民認定例はほとんどなく、昨年 1 人が認定されたにとどまる。

現行制度では、在留資格がない非正規滞在の外国人は入管施設へ収容するのが原則だ。ただ一定の条件を満たす人は「仮放免」として、入管施設外での生活を認められる。一見自由にも映る立場だが「おりのない監獄」(ある仮放免者)と呼ばれるほど制限だらけ。セレンさんの生活も 22 年 8 月から一変した。まず県外に出られない。「夢だった東京ディズニーランドはあきらめました」何より働いて収入を得ることが禁止だ。同郷の親戚の援助に頼らざるを得ない生活。「高校生になったらアルバイトで家族を助けたいけどそれもできない」。生活保護も受けられない。厳しい制限を設けることについて、入管庁は「そもそも退去すべき人に労働などを認めるのは不相当」と正当性を強調するが、収入手段を全て奪うのは憲法違反との指摘も識者から出る。入管難民法改正案でも条件緩和はない。セレンさんは問う。「私は日本で育ち、弟妹は日本で生まれた。みんなと同じ人間なのになぜ何の権利もないのですか。私たちに死んでほしいのでしょうか」

近藤敦・名城大法学部教授の話 憲法は 13 条で個人の尊厳や生命に関する権利を保障し、25 条で「健康で文化的な生活を営む権利」として生存権を保障する。入管庁が強制送還できない外国人を仮放免しながら、働くことも生活保護受給も認めないのは、尊厳ある人として生存する権利を脅やかし、憲法に違反する疑いがある。日本が批准する国連自由権規約も「何人も品位を傷つける取り扱いを受けない」としており、これにも抵触する。

◆**仮放免とは？近年急増** 入管庁は、在留資格がなく違法状態の在留外国人について、入管施設への収容を原則としているが、難民審査が長期化したり子どもだったりする場合などは「仮放免」として施設外生活も認める。ただし労働の禁止など厳しい制限がある。仮放免者は 2019 年 6 月には 2303 人だったが、新型コロナ禍で施設収容が難しいことなどが影響し、21 年末には 4174 人(いずれも退去命令を受けた人)に急増。20 歳未満は 19 年 6 月時点で 304 人で、さらに増加しているとみられる。難民不認定への

異議申し立てや再申請などで仮放免生活が長期に及ぶ人も多く、19年6月時点の仮放免者のうち4割が「5年以上」だった。
 ◇◇◇ 在留資格のない外国人の強制送還を促進する入管難民法改正案の国会審議が13日から始まる。その陰で、日本で生まれ育ちながら在留資格がなく「仮放免」という立場に置かれた外国人の子どもたちの過酷な実態が置き去りにされている。小さな苦悩の声を4回にわたり緊急報告する。(池尾伸一)

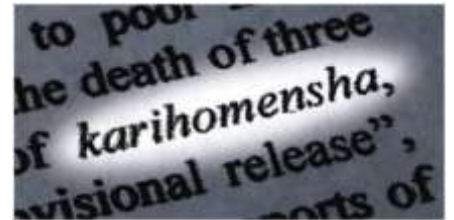
仮放免の外国人ができること、できないこと	○は可能 Xは不可	※入管庁などへの取材に基づく
▶ 働くこと	X	
▶ 都道府県境をまたぐ移動(許可ない場合)	X	
▶ 国民健康保険の加入	X	
▶ 生活保護の受給	X	
▶ 義務教育を受けること	○	
▶ 高校授業料無償化の対象になること	X	
▶ 保育園に行くこと	X	
▶ 一部の予防接種 コロナワクチン注射を受けること	○	

連載 この国で生まれ育って「入管法改正」の陰で 解説
 「仮放免」に国連も懸念 外国人の過酷な処遇、難民認定数も極端に少なく

東京新聞 2023年4月12日 配信

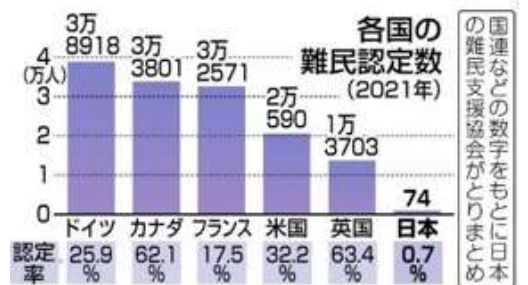
在留資格がない状態で日本で暮らす外国人に対し、働くことを禁じるなど生活を厳しく制約する「仮放免」制度。国連は人権侵害の疑いが濃いとして改善を促すが日本は応じようとしな。政府が今国会で成立を急ぐ入管難民法改正案についても、外国人を取り巻く環境がさらに悪化するとして識者から批判が相次ぐ。(池尾伸一)

◆勧告を事実上無視する日本 「karihomensha」国連の「自由権規約委員会」は2022年秋「仮放免」の外国人について労働も生活保護受給も禁じていることに、日本語読みをローマ字表記して懸念を表明。日本に「収入の手段を与えるべきだ」と要請した。「子どもの権利委員会」も19年、仮放免の子が医療も十分受けられない状況を問題視し「保健サービスを与えるべきだ」と求めた。だが、日本は勧告を事実上無視している状況だ。



国連の人権に関する委員会の勧告にも記載された“karihomensha”の文字

◆帰らないのではなく「帰れない」 在留資格をめぐる出入国在留管理庁(入管庁)の判断基準自体についても、疑問の声が聞かれる。在留資格がなく退去命令を出された人の多くは命令に応じるが、帰国を受け入れられない人が入管施設や「仮放免」で暮らす。入管庁は彼らについても「本来早く帰国すべきだ」というが、入管問題に詳しい国士舘大学の鈴木江理子教授は『「帰らない」のではなく「帰れない」人も多い』と分析する。鈴木教授によると、迫害から逃れ来日しながら難民と認定されず、退去命令が出ても迫害が怖いので帰国できないまま申請を繰り返す例が多いという。セレンさん一家もこのケースで、父親は「帰国したら逮捕される」と恐れる。難民条約の批准国である日本は、迫害から逃れた人を難民として受け入れる義務を負う。しかし、認定率は21年0.7%、22年約2%にとどまり、25%(21年)のドイツなど他の先進国と比べ極端に低い。難民問題に詳しい渡辺彰悟弁護士は「日本は、命からがら逃げてきた人に迫害された証拠を厳格に求めるなど、ハードルを高くしすぎて、保護すべき人を保護できていない」と指摘する。労働目的で来た人たちに関しても入管庁は、子どもが10年以上日本で育った場合などには「積極的に在留資格を与える」とのガイドラインを定めながら、許可件数を年々減らしている。◆改正案は「方向が誤っている」と有識者 入管難民法改正案は、仮放免に加え、収容施設外の外国人を「監理人」と呼ばれる民間人の監督下に置く制度を新設する。だが、退去命令が出た人は従来通り労働は禁止。違反には懲役も含め罰則も導入される。現行法は難民申請中の人の強制送還を禁じているが、改正案は申請回数が2回を超えると、申請中でも強制送還できるようになる。親が送還されたり、



国連などの数字をもとに日本
 の難民支援協会がとりまとめた

家族ごと送還されたりする例が増えると思われる。入管問題に詳しい指宿昭一弁護士は「改革の方向が誤っている。難民認定の方法を国際基準に沿ったものに根本的に改める一方、仮放免の人々の生活条件も大幅に見直すことが急務だ」と国に改善を求める。

連載 この国で生まれ育って「入管法改正」の陰で ②

「働く権利がない」大学4年生…就職内定した同級生を横目に涙 「社会に貢献」望むのに

東京新聞 2023年4月13日 配信

「『働く権利がない』のがこれほどつらいものだとは知りませんでした」関西地方に住む大学4年生のみゆきさん(21)が沈んだ声で言う。両親がペルー出身で非正規滞在者のため、日本で生まれ育ちながら小学6年生の時に出入国在留管理庁(入管庁)から退去命令を出された。在留資格がない立場に追い込まれ、働くことも禁じられた「仮放免」のまま。国を相手に在留資格を求めた訴訟も敗訴が確定している。

支援団体の援助で大学進学はできたが、卒業が近づくにつれ「働く権利」がない現実が重くのしかかる。

大学のインターンシップ(就業体験)を利用し、自治体の観光課の仕事を体験してみた。地域を回り、観光スポットの写真を撮影したり、郷土史家の話を聞いたりしてサイトに掲載した。職員のチームワークも印象深かった。「これが『働く』ってことか」。アルバイトも禁じられた身には新鮮だった。しかし、4年生になり履歴や志望動機を書いた「エントリーシート」を作成、企業に提出する直前に手が止まった。「もし面接で在留資格を聞かれたらどうしよう。『ない』と答えればそこで落とされるに違いない、と怖くなりました」。大学の就職支援担当者にも「支援しすぎると私たちもペナルティーを受けるかも。どこまで支援できるか分からない」と言われた。「私はどこにも頼ることができないのです」。早くも内定が出た同級生を横目に絶望から涙する日々だ。

◆「働いて自立して…望みはそれだけ」「働く」という、人間の最も基本的な行為を禁じる入管行政の過酷さは、NPO法人「北関東医療相談会」が昨年、約140人の仮放免者を対象に行ったアンケートでも浮き彫りとなった。年収は「0円」の答えが7割。自由回答では「自分は(日本社会の)お荷物と感じて恥を感じる」(30代男性)など自尊心を奪われる苦悩が吐露された。政府が今国会で成立を急ぐ入管難民法改正案でも厳しい条件は維持される。それどころか強制送還を拒否する人に対する刑事罰が新設されるなど、退去への圧力が強まる。人々がそれでも日本を去れないのは、本国内で迫害される恐怖など切実な事情があるからだ。「母国」のペルーには行ったこともないみゆきさんは「私の故郷は日本以外にない」と思う。高校のブラスバンド部では心を開ける友人もたくさんできた。20歳になった時、住民票がないみゆきさんには自治体から成人式の招待状が届かなかった。見かねた友人らや支援団体が手作りの成人式を開いてくれ、着物まで貸してくれた。いま唯一希望を託すのは入管庁が人道上の観点から在留資格を許可すること。「働いて自立して自分を育ててくれたこの社会に貢献したい。私の望みはそれだけです」



住民票がなく成人式に出られなかったため、友人や支援者が手作りで開いてくれた成人を祝う会に出席したみゆきさん(支援者撮影)

連載 この国で生まれ育って「入管法改正」の陰で ③

「教室に行ってみみんなの前で連れて行きますよ」 入管職員の「脅し」で、小学 5 年生の世界は変わった

東京新聞 2023 年 4 月 14 日 配信

高校 2 年生の優菜さん(16)＝仮名＝が、日本の在留資格がないと知ったのは小学校 5 年生の時だった。母親と一緒に出入国在留管理庁(入管庁)の施設に行き職員と向き合っていた時。職員が優菜さんに向けて言ったという。「あなたも早くペルーに帰りなさい。そうしないと教室に行ってみみんなの前で連れて行きますよ」入管庁の役割すらよく知らなかった優菜さんが驚いて泣きだすと、職員は「泣いたって変わらないよ」。優菜さんは、ペルーから来た非正規滞在者の両親の下、日本で生まれた。その後、母が定住資格を持つブラジル出身の日系 3 世の今の父と再婚した後も、母や兄とともに在留資格が与えられない。優菜さんは知らなかったが、小 2 の時に退去命令が出され、いつの間にか就職も自由な移動も禁じられる「仮放免」になっていた。職員の言葉で、優菜さんの世界は変わった。「私は日本にいてはいけない人間だ」。知られたら友達も離れると思い、在留資格がないことは秘密にしようと決めた。県外に遊びに行こうと誘われてもうその理由で断った。「うそのたびに心が重くなり、生きるのが苦しくなりました」中 3 になり、教室に入ろうとすると一歩も足が進まなくなった。「教室で連行されるイメージが浮かび怖くなりました」。1 年間は別室で自習して過ごした。



仮放免の許可書を手にも「ママを犠牲に在留資格をもらうなんて考えられない」と話す高校生

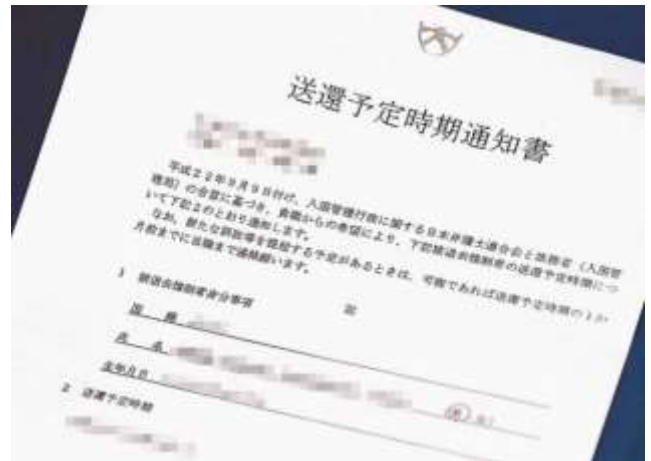
◆「子どもの最善の利益」どこへ…入管庁の対応 日本も批准する「子どもの権利条約」は、国籍を問わず子どもの人権尊重を義務付ける。にもかかわらず、入管行政の現場では心ない言動が横行するとの指摘は少なくない。「就職できないのだから努力しても無駄と言われ、やる気を失った」と本紙に証言する人も。入管庁は「子どもに直接帰国を促すことは避けているはず」(審判課)と説明する。だが、現場に詳しい丸山由紀弁護士は「退去を促そうと脅しじみた言動が放置されている。特に子どもには心の傷になりやすく、第三者のチェック態勢が必要だ」と話す。同条約は、在留資格を与える判断でも「子どもの最善の利益」尊重を規定。入管庁のガイドラインも日本で生まれた子が 10 歳以上になった場合は「(親子ともに)在留許可を与える方向で検討する」とする。しかし、鈴木江理子国士舘大教授は「近年はガイドラインに該当しても認められない傾向が強まっている」と指摘する。優菜さんの家庭もそのケース。最近、入管職員は優菜さん親子に母がペルーに帰るなら子どもには在留資格を許可する可能性があると言うようになった。だが、優菜さんは「ママを犠牲に在留資格をもらうなんて考えられない」ときっぱり話す。「うちはお金がなく晩ご飯のおかずが卵焼きだけの時もあります。それでも家族で食べると楽しいのです。こんな毎日が続くことも許されないのでしょうか」

連載 この国で生まれ育って「入管法改正」の陰で ④

「小さな家族を壊さないで」 父が突然国外退去を求められた高2男子 一家はパニックに陥った

東京新聞 2023年4月15日 配信

「僕たちから父親を奪わないでください。小さな家族を壊さないでほしい」茨城県の高校2年生、純也さん(16)＝仮名＝は訴える。「送還予定時期通知書」。父のクマールさん(50)に、出入国在留管理庁(入管庁)からこんな通知が来たのは今年1月初めだ。クマールさんを間もなく国外退去させるという突然の通告に、一家はパニックに陥った。家庭は国際色豊かだ。純也さんが日本人、母(50)と弟(7つ)がフィリピン国籍、父はインド国籍だ。フィリピンから日本に働きに来た母が日本男性と結婚。純也さんが生まれたが、男性は病死した。その後、母は家族ぐるみで友人だったクマールさんと結ばれた。難民申請が認められず非正規滞在者のクマールさん。日本人の夫を亡くした外国籍女性として定住資格のある母と結婚して6年がたつ今も在留資格が与えられず、労働も禁止された「仮放免者」だ。このため母が小さなレストランを始め、クマールさんは「主夫」として家事を担ってきた。純也さんの夢はプロ野球選手。クマールさんは全力で応援してきた。野球部の早朝練習のために毎日午前6時に高校に車で送り、夜も迎えに。週末の試合もスタンドに必ずクマールさんの姿があった。最初「お兄ちゃん」と呼んでいたのが、いつの間にか「パパ」と呼んでいた。送還通知が来て、弟は父から片時も離れなくなった。風呂も寝る時も一緒。「僕も6歳の時に実の父を亡くしたので、弟の気持ちがよく分かります。パパがいなくなるのが怖いでしょう」。純也さんは言う。

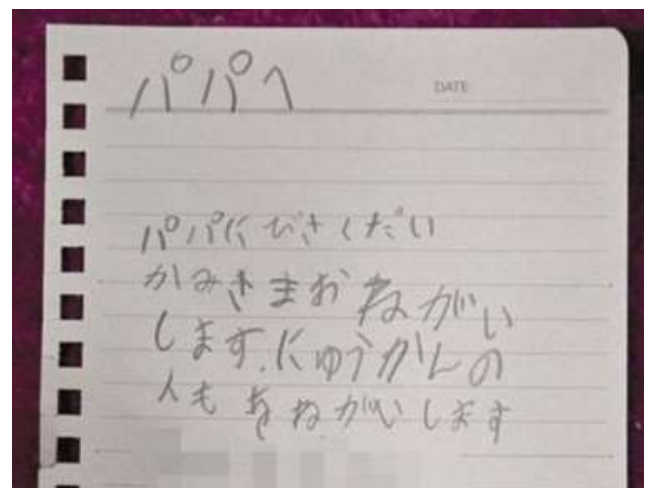


クマールさんのもとに届いた「送還予定時期通知書」。クマールさんを間もなく母国インドに送還すると明記されていた(一部画像処理)



家族と談笑するクマールさん＝茨城県で

◆国際的には「家族の権利」も日本では… 日本も批准する国連の自由権規約は、「家族は保護を受ける権利がある」と規定。子どもの権利条約も「子どもの最善利益」を考慮し「両親から意思に反して児童が分離されるべきでない」と定めている。実際、海外では子どもと分離され送還されそうになった親からの個人通報で、国連が調査し送還を差し止めた例も。だが、日本の入管行政は国連への個人通報制度を導入していない。支援者らは、せめて入管難民法に家族や子どもの権利尊重を明記するよう求めてきた。しかし政府が今国会で成立を急ぐ改正案についても「家族が一緒に暮らす権利などの国際基準は盛り込まれていない」(駒井知会ちえ弁護士)。



クマールさんの次男が書いた手紙。「パパ」がピザをもらうことができるよう望んでいる(一部画像処理)

◆医療費の借金負担まで… 通知を受け純也さんの家族は、クマールさんの在留資格を求め国を相手に

提訴した。このため強制送還は今のところ免れている。だが、追い打ちをかけるようにクマールさんを病気が襲った。肝臓に膿うみがたまり緊急入院。一時は命が危ぶまれる容体となり、入院は1カ月に。クマールさんは保険証もないため、医療費は百数十万円に上った。借金負担も今後一家にのしかかる。純也さんは思う。「なぜ父は普通に日本に暮らせないのでしょ。僕たちはただ家族一緒に普通の生活がしたいだけなのに…」(池尾伸一)

*** ところで入管庁と云えば次の“ウイシュマさん死亡問題”を抜きにして語ることはできない。少し報道を遡って、以下に関連記事を転載させていただきたい。***

ウイシュマさん死亡問題、入管庁が報告書公表 職員の「誇張やアピール」疑う意識を問題視

東京新聞 2021年8月10日 配信

名古屋市港区の名古屋出入国在留管理局で3月、収容中だったスリランカ人女性ウイシュマ・サンダマリさん＝当時(33)＝が亡くなった問題で、出入国在留管理庁は10日、名古屋入管の対応などを検証した最終調査報告書を公表した。職員による不適切な対応や医療体制の不備を認め、「危機意識に欠け、組織として事態を把握できていなかった」と指摘。情報共有の徹底や常勤医師の配置などの改善を求めた。

◆**処遇と死亡の因果関係は触れず** 佐々木聖子長官は記者会見で「人の命を預かる行政機関としての緊張感や心の込め方が不十分だった」と述べ、当時の名古屋入管局長と次長を訓告、警備監理官ら2人を嚴重注意処分にしたと明らかにした。入管庁は近く、遺族に限定し、ウイシュマさんの生前の様子を収めた監視カメラ映像を開示する。ウイシュマさんは昨年8月に収容され、今年3月6日に死亡した。最終報告では死因を「病死と考えられるが、複数の要因が影響した可能性があり、具体的な経過の特定は困難」と記した。収容中の処遇と死亡との因果関係には触れなかった。



◆**職員のからかい「人権意識欠ける」** 名古屋入管の対応では、1月以降、嘔吐を繰り返して自力で歩けないほどに衰弱したウイシュマさんの訴えを、職員が「仮放免に向けた誇張やアピール」と受け止めた点を問題視。「誇張と疑ったとしても、医療的対応が必要な状況を見落とすことのないようにする必要があった」と不適切な対応を認めた。ウイシュマさんが点滴治療や外部病院での受診を繰り返し求めた際に、名古屋入管の職員が内規に反して上司に報告せず、現場レベルで判断していたことも判明。カフェオレをうまく飲み込めず鼻から噴き出したウイシュマさんに、職員が「鼻から牛乳や」とからかったことを「明らかに人権意識に欠ける不適切な発言」として、職員の意識改革の徹底を求めた。医療対応としては、非常勤医師が週2回、各2時間しか勤務しない名古屋入管の医療体制に問題があったとして、常勤医師の配置や休日対応など診療体制の強化を要請した。

◆**仮放免認めなかった判断、不当とせず** ウイシュマさんの仮放免を認めなかった名古屋入管の判断は「不当とまでは評価できない」とした一方、体調不良者の仮放免の運用は改善点があると述べた。調査は、入管庁が名古屋入管職員や診察した医師ら63人に聞き取りを行い、医療関係者ら有識者から意見を得てまとめた。この問題を巡っては、入管難民法改正案の国会審議で野党が死亡前の監視カメラ映像の開示を要求。拒否した政府が法案成立を断念した。

23 回助け求めても 3 時間放置…ベッドから落下のウイシュマさんに職員入管庁が映像公開 「人の道を外れてる」と遺族ら

東京新聞 2021 年 8 月 12 日 配信

名古屋出入国在留管理局で収容中のスリランカ人女性ウイシュマ・サンダマリさん＝当時(33)＝が死亡した問題で、出入国在留管理庁は12日、監視カメラ映像の一部を遺族に公開した。亡くなる8日前、ベッドから落ち23回も助けを求めたが、3時間放置された状況を確認。遺族は「姉は動物のように扱われ殺された。日本の全ての外国人に見てほしい」と訴えた。

◆「姉は動物のように扱われ殺された」この日、上川陽子法相と佐々木聖子入管庁長官が遺族に謝罪。最終報告書の説明後、約1時間の映像が遺族らに公開された。視聴中、妹のワヨミさん(28)とポールニマさん(27)は終始泣き、ワヨミさんは直後にショックで吐いたという。ワヨミさんは「日本の全ての外国人は見るべきだ。入管は人の道を外れている」と記者団の前で泣き崩れた。ワヨミさんらによると今年2月下旬、ウイシュマさんが何度も点滴を求めたが職員は「私たちは医者でない」と対処しなかった。同月下旬朝にはベッドから落下。23回も助けを求め職員2人が来たが、手足を引っ張るだけでベッドに戻そうとせず、毛布をかけその場を去ったという。ポールニマさんは「職員は姉が迷惑で面倒な人間と思っているようだった」と訴えた。死亡3日前の3月3日には看護師が、ウイシュマさんに「耳の奥で音が聞こえる。幻覚が見えると病院で言うように」などと何度も指示していたという。いとこのマンジャリさんは「看護師が精神障害と決めつけていた」と怒りを口にした。(望月衣塑子)



ウイシュマさんの監視カメラの映像一部を視聴後、泣き崩れる妹ワヨミさん(右)とポールニマさん＝12日、都内で

遺族憤り「私たちが貧しい国出身だからか」 ウイシュマさん収容死で入管職員を不起訴

東京新聞 2022 年 6 月 17 日 配信

名古屋出入国在留管理局(名古屋入管)でスリランカ人女性ウイシュマ・サンダマリさん＝当時(33)＝が収容中に死亡した問題で、名古屋地検は17日、殺人容疑で告訴されていた当時の名古屋入管職員13人を「嫌疑なし」として不起訴にした。13人は当時の局長や警備監理官、看守責任者ら。金山陽一次席検事は「死因の特定に至らず、不作為による殺人や殺意を認める証拠がなかった」と説明。保護責任者遺棄致死罪や業務上過失致死罪の適用も検討したが、死因が不明で職員の行為と死亡の因果関係を認定できなかったという。同じ理由で、支援者による刑事告発についても不起訴とした。ウイシュマさんは2020年8月に収容され、昨年1月から体調が悪化。2月に尿検査で「飢餓状態」を示す異常値が出たが、点滴などの治療を受けられないまま3月6日に死亡した。遺族は昨年11月、「保護す



当時の名古屋入管幹部らが不起訴処分となり、ウイシュマ・サンダマリさんの遺影を手に沈痛な表情を見せる妹ポールニマさん(右)とワヨミさん＝17日、名古屋地検で

る義務があったのに適切な医療を提供しなかった。死亡しても構わないという未必の故意があった」として、殺人容疑で当時の局長らを刑事告訴していた。名古屋入管は「捜査当局の判断について回答する立場にない」としている。

◆「素人でも死にそうと分かるのに」 検審申し立てへ ウィンシュマさんの遺族は17日、名古屋地検を訪れ、不起訴の通知を受けた。代理人の指宿昭一弁護士によると、地検は特定できなかった死因について、栄養失調を意味する「低栄養と脱水症による身体合併症」の可能性を挙げた。その上で入管職員の対応を検討した結果、「医師の診察を受けさせたり、経口補水液を飲ませたりしている。バイタルチェックで問題ないと判断して救急搬送しなかったのも不合理ではなく、刑事責任はない」と説明した。指宿弁護士は「監視カメラ映像を見れば素人でも死にそうだとわかるのに、こんな判断はおかしい」と嫌疑なしとした地検の判断を批判。不起訴を不服として、検察審査会に申し立てる意向を示した。妹のワヨミさん(29)は「1年以上たっても死因が分からない。怒りと悲しい気持ちを感じる」と肩を落とし、ポールニマさん(28)は「こんな結論は、私たちが貧しい国出身だからか」と憤りをあらわにした。(角雄記、豊田直也)

「姉のように命落とす人また出る」 収容期限ない入管法改正案の国会提出に ウィンシュマさんの遺族らが反対会見

東京新聞 2023 年 1 月 12 日 配信

外国人の収容ルールを見直す入管難民法改正案が、23 日召集の通常国会に提出される見通しとなった。これを受け、2021 年 3 月に名古屋出入国在留管理局で収容中に亡くなったスリランカ人女性ウィンシュマ・サンダマリさん＝当時(33)＝の遺族らは 12 日、東京都内で記者会見し「収容について上限設定や司法審査もない法案ならば、外国人の人権がないがしろにされる」と訴えた。入管難民法改正案は 2021 年に国会で審議入りしたが、ウィンシュマさんの死亡などを受けて衆院法務委員会で採決が見送られ、同年 10 月の衆院解散で廃案となった。今回の改正案は旧案を一部修正するものの、難民申請中の送還を可能にし、収容期間の上限は現行通り設定せず、収容に関する司法審査がないなど、骨格は維持されるとみられる。会見でウィンシュマさんの妹・ポールニマさん(28)は収容期間の上限設定がなければ「入管が都合のいいよう収容してしまうのではないかと懸念を示した。その上で「姉は無期限で収容されて健康が悪化し、命を落とした。無期限収容を変えないと、姉のように命を落とす人が出るのが当たり前になる」と訴えた。旧案で、原則として難民申請を 2 回までに制限し、暴れるなどして送還を拒否した場合に懲役 1 年以下の罰則を設けるとした点は維持される見込み。もう 1 人の妹・ワヨミさん(30)は「送還拒否で懲役刑というのは、外国人への人権の侵害で、正しいルールではない」と厳しく指摘した。遺族を支援する弁護士からも批判が相次いだ。高橋済弁護士は「(旧案を巡る)与野党での修正協議やウィンシュマさんの事件の反省を全く踏まえてない。収容期間の上限設定がないというのは、国際水準からほど遠い状況だ」と非難。駒井知会弁護士も「現状でも難民条約が守られていないのに、さらに状況が悪化する」と怒りをあらわにした。指宿昭一弁護士は「2 年前の法案の骨格を維持する内容なら、法案を出すべきではない。ウィンシュマさんの死の真相は解明されてなく、入管施設の改善が進んだとも思えない」と話した。(望月衣塑子)



記者会見するポールニマさん(右)とワヨミさん

ウイシュマさん「私きょう死ぬ」 呼びかけに反応しない姿も 弁護団が監視カメラの映像公開【動画あり】

東京新聞 2023年4月6日 配信

2021年3月、名古屋出入国在留管理局で収容中に死亡したスリランカ人女性ウイシュマ・サンダマリさん＝当時(33)＝の遺族が国に損害賠償を求めた訴訟の弁護団は6日、国側が提出した監視カメラ映像の一部を公開した。

映像は、21年2月22日から、死亡が確認された3月6日までのものを弁護団が計7本、計約5分間に編集した。「病院に行きたい」と訴えるウイシュマさんに「権力ないからできない」と応じる入管職員の様子や、「サンダマリさん、サンダマリさん」と何度も呼びかける職員の声に反応しない、死亡確認直前のウイシュマさんの様子などが収められている。(以下、動画は省略させていただくが、内容は観るに堪えないものであった。)

① 2021年2月22日9時50分～

飲食ができなくなったが「できれば食べたい」と訴えるウイシュマさん

② 2021年2月23日19時17分～

「私きょう死ぬ」と口走るウイシュマさん

③ 2021年2月23日19時27分～

病院に行きたいというウイシュマさんに「できない」と応じる入管職員

④ 2021年3月2日18時45分～

ウイシュマさんを動かそうとして「重たいわ」と愚痴をこぼす看護師

⑤ 2021年3月5日14時31分～

うめくウイシュマさんに「痛いのが分からんようになったらかなわん」と声をかける看護師

⑥ 2021年3月5日14時50分～

横たわるウイシュマさんを前に「この間の産婦人科の先生はかっこいい」などと雑談する職員ら

⑦ 2021年3月6日14時7分～

「サンダマリさん、サンダマリさん」という職員の呼びかけに反応しないウイシュマさん



ウイシュマ・サンダマリさん(遺族提供)